静岡県立朝霧野外活動センター利用団体の教育的効果に関するアンケート調査結果
－平成22年度－

平成24年2月13日

白木 賢信（東京家政大学）

Ⅰ　調査結果の概要

1.　利用団体が小学校相当世代に再び偏りつつあり、利用宿泊数は「1泊」と「2泊」の占有率が年々高くなっている。

利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12歳」が3ヶ年とも最も比率の高いカテゴリであることは変わりない。但し、平成21年度までは「中学校」「13～18歳」の比率が徐々に高くなる傾向にあったが、今回の調査で再び小学校相当世代に偏りつつある。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」の占有率が年々高くなっており、平成22年度では「1泊」と「2泊」の合計比率が90%に達している。

2.　利用目標が最も高いのは「自主性や協調性、社会性を身につける」で変わりなく、利用目標の達成度は「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が全体の9割を占めている。

利用目標とその達成度について、4ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標であるが、次いで比率の高い項目は年々変化している。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どで全体の9割を占め、「期待以上にできるようになった」は2割弱で推移している。

3.　利用後の参加者の変容は、「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」の比率が徐々に突出しつつある。

利用後の参加者の変容について、上位3項目は4ヶ年とも変わりないが、そのうち上位2項目である「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」が平成22年度では40%台に達し、徐々に突出しつつある。

4.　繰り返し利用することによって予想される変容は、「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」が3年間順位を変動しながら上位項目で推移している。

繰り返し利用することによって予想される変容については、上位項目である「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」は3ヶ年とも変わりないが、3項目間の順位は変動しながら推移し、3項目間の比率差は10%程度で推移している。平成22年度に関しては3.で挙げた「利用後の参加者の変容」と必ずしも連動した順位となっていない。

Ⅱ　調査の概要

1.　目的

本調査の目的は、静岡県立朝霧野外活動センター（以下、センターと呼ぶ）利用団体のセンター利用による教育的効果を明らかにすることである。それにより、施設の評価は利用者数の増減に頼るところが大きい中、それ以外の評価指標としての基礎資料を提示するが、昨年度に引き続き、平成19～22年度の4年間における経年変化の傾向もあわせて提示することにしたい。

2.　内容

上述の目的を達成するために、センター利用による教育的効果に関する調査を行うが、その内容は以下の通りである。

（1）　利用団体の種類
(2)　利用団体の主たる年齢層
(3)　利用宿泊数
(4)　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）
(5)　利用目標の達成度
(6)　利用後の参加者の変容
(7)　繰り返し利用することによって予想される変容

3.　対象

平成22年度のセンター利用団体

4.　方法

質問紙による配付回収法で、具体的な手順は下記の通り。

（1）　センター担当職員が、各利用団体担当者に、利用期間中にアンケート形式の質問紙を配付する。
(2)　各利用団体担当者は、センター利用後約１ヶ月の間に質問紙に回答し、回答済の質問紙をファックスでセンター宛に返送する。

5.　調査票（質問紙）の回収状況

回収数（率）　102（24%）　　有効回収率　102（24%）

なお、ここで算出した回収率・有効回収率は、平成22年度における統計上のセンター利用団体数（428団体）を母数としている。

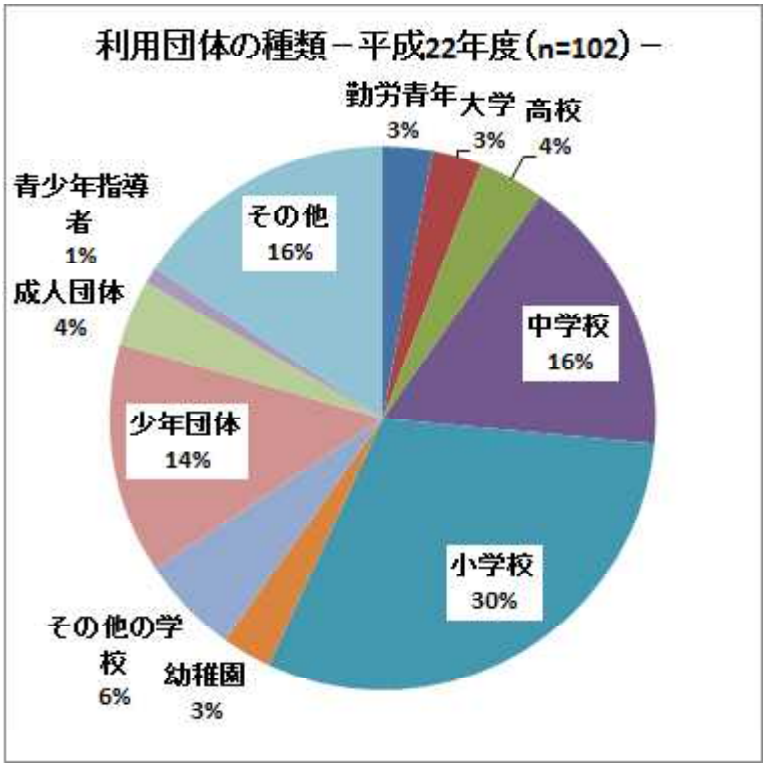
6.　実施期間

平成22年4月～平成23年3月

Ⅲ　調査の結果

1.　利用団体のプロフィール

ここでは、本調査の対象となった利用団体のプロフィールについて述べることにしよう。まず、利用団体の種類についてであるが（図1）、最も比率が高いのは「小学校」の30%で、次いで「中学校」および「その他」の16%で続いている。なお、学校関係は62%で全体の6割以上を占めている。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

学童保育(2)、子ども会(2)、NPO法人、おやこ劇場、音楽団体、家庭教育学級、教育相談機関、教会、少女団体、スポーツクラブ、青少年育成協力会、知的障害者通所施設、不思議な家族、ボーイスカウト

図1　利用団体の種類

この利用団体の種類の平成19～22年度間の変化について示したものが図2である。これによると、「小学校」の比率は平成19年度から平成21年度にかけて年々低くなっていたが、平成22年度で上昇に転じて30%を占めている。次いで比率の高い「中学校」は、平成21年度とほぼ同様の比率で推移しているが、「少年団体」は平成20年度から年々比率が下がっている。

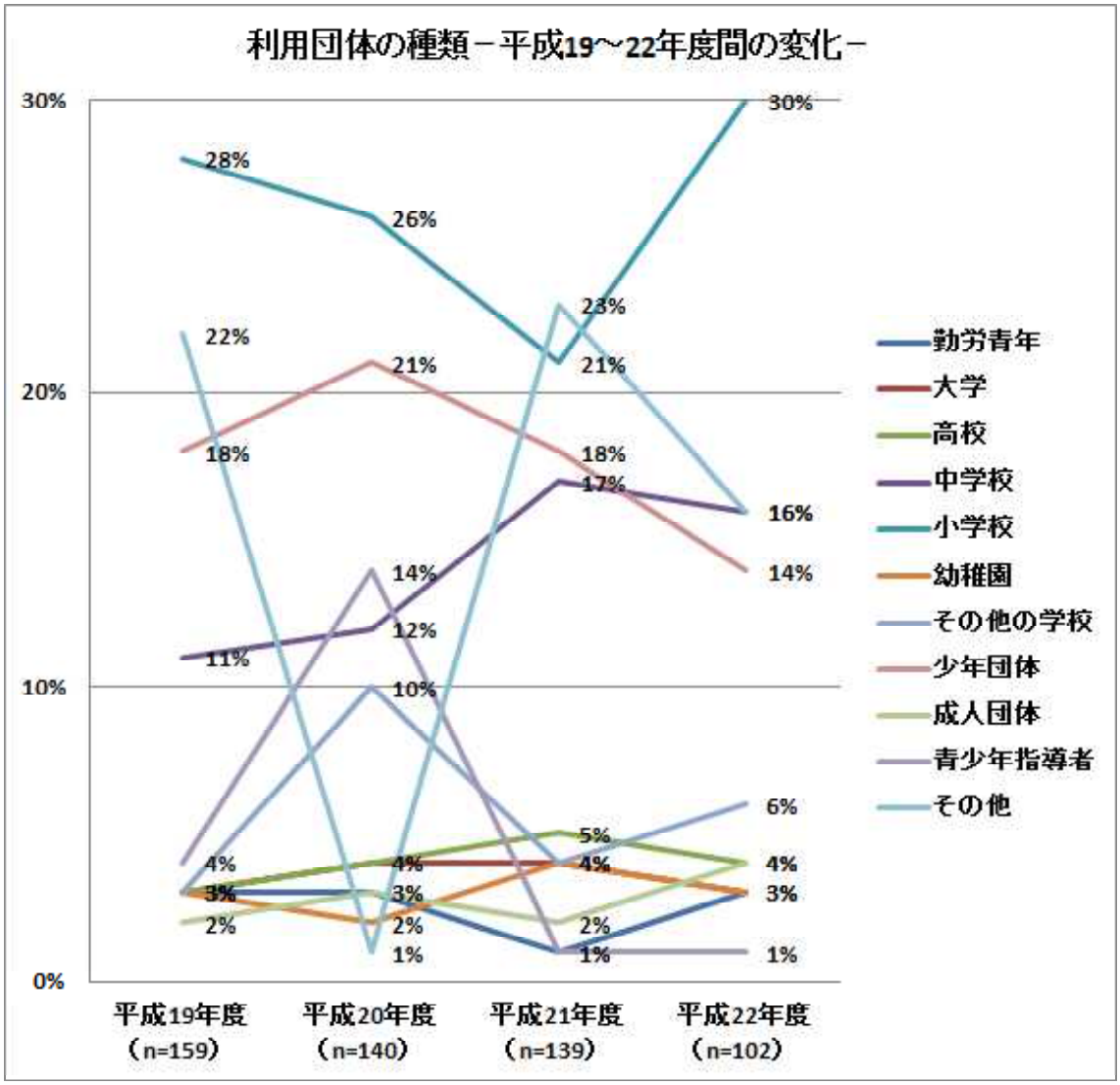


図2　利用団体の種類－平成19～22年度間の変化－

次に、利用団体の主たる年齢層については（図3）、「7～12歳」が55%で最も高く全体の半数以上である。次いで高いのは「13～18歳」の25%である。

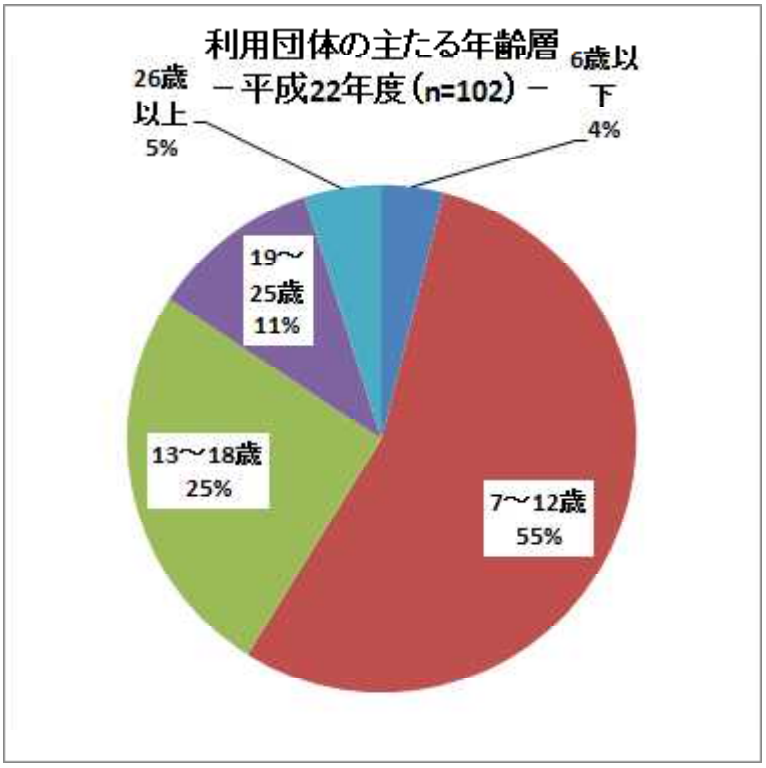


図3　利用団体の主たる年齢層

この利用団体の主たる年齢層を平成19～22年度の変化でみると（図4）、今年度最も比率の高い「7～12歳」は4ヶ年とも最も高い比率で、平成22年度では最高比率に達している。一方、「13～18歳」の比率は平成21年度までは年々高くなってきたが、平成22年度は若干低くなっている。なお、その他の年齢層はほぼ横ばいで推移している。

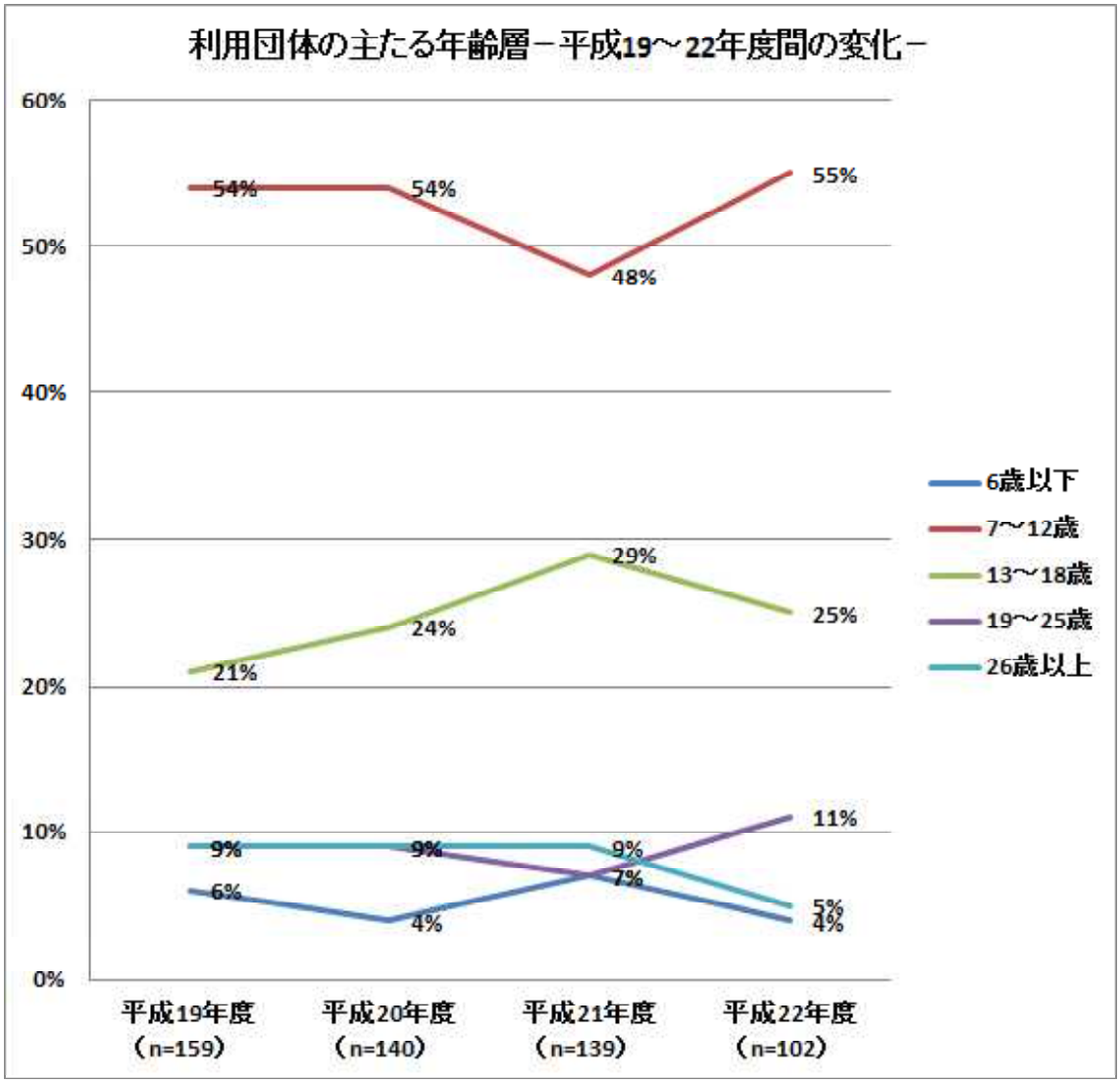


図4　利用団体の主たる年齢層－平成19～22年度間の変化－

さらに利用宿泊数については（図5）、「1泊」と「2泊」の比率が最も高くそれぞれ45%で、両者が全体の9割を占めている。

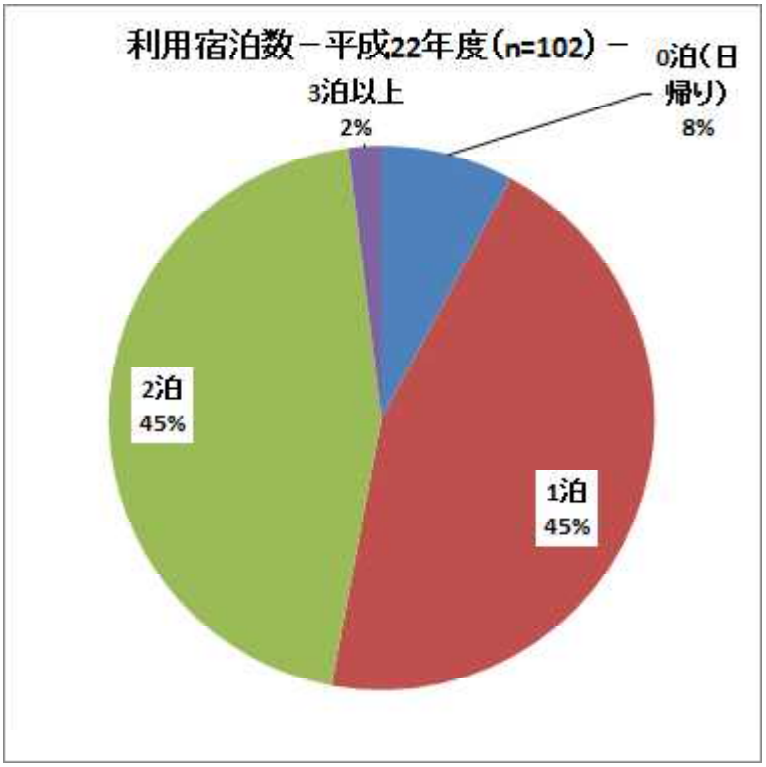


図5　利用宿泊数

この利用宿泊数を平成19～22年度間の変化でみると（図6）、「1泊」と「2泊」の占有率が年々高くなっており、平成22年度では「1泊」と「2泊」の合計が90%まで達している。それに対して、「0泊（日帰り）」および「3泊以上」の比率はそれぞれ年々低くなっている。

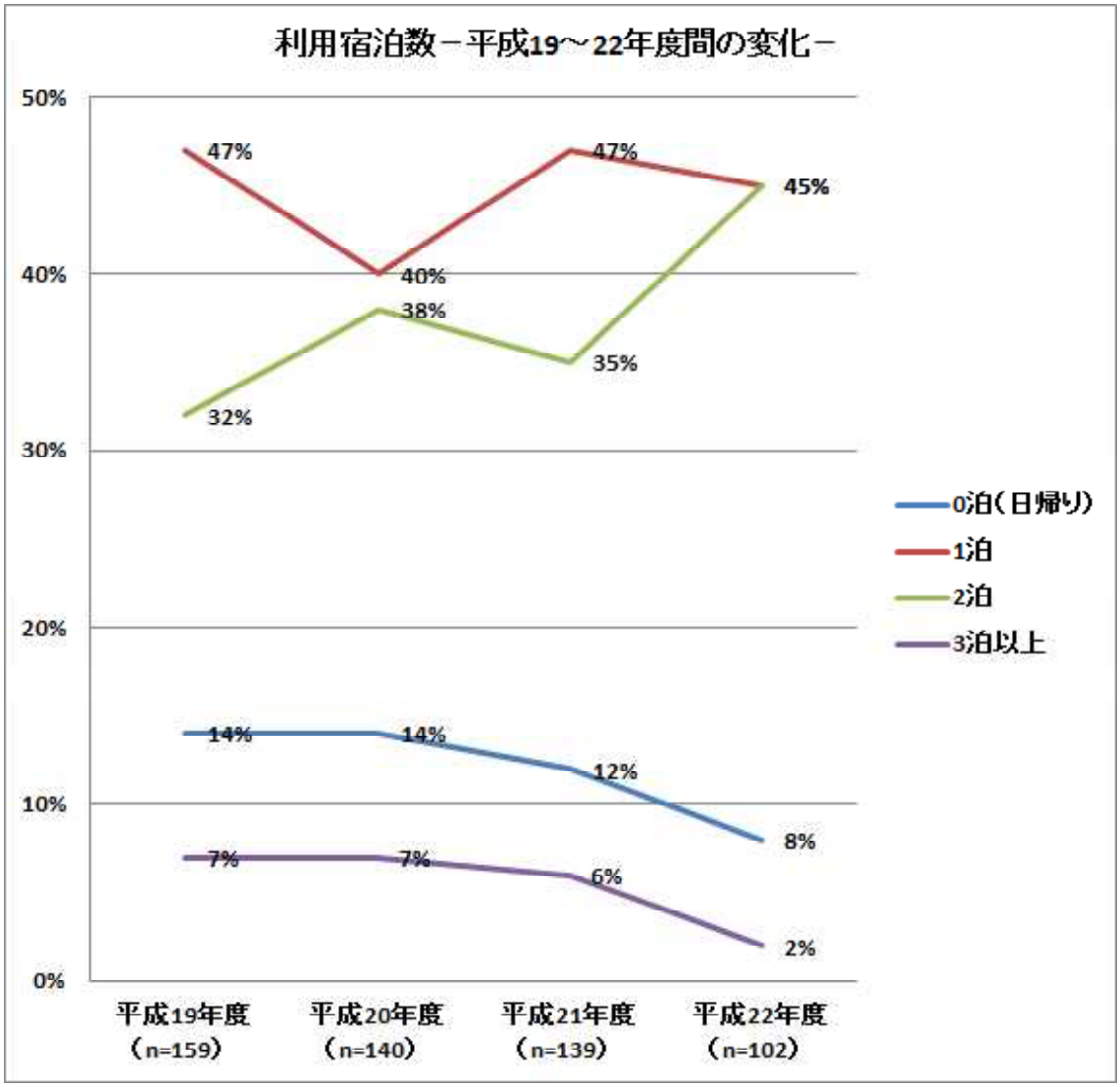


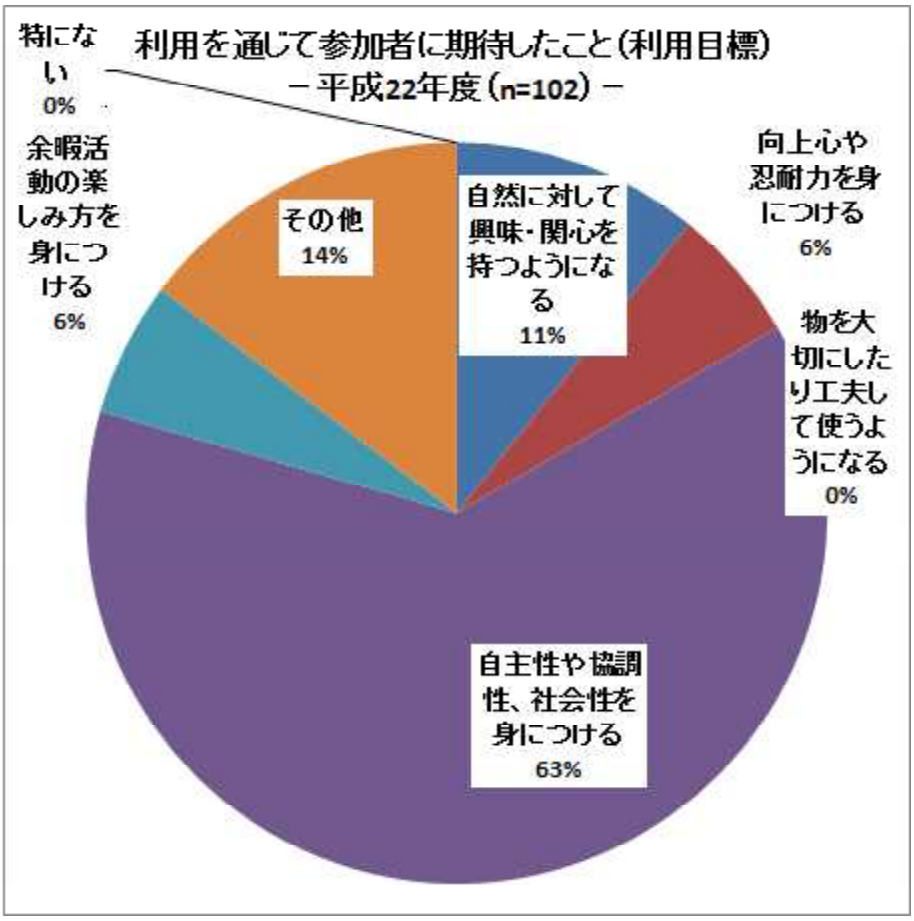
図6　利用宿泊数－平成19～22年度間の変化－

2.　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

ここでは、各団体が利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）（単数回答）を取り上げるが、ここでの項目は、青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告『青少年の野外教育の充実について』（平成8年7月）で挙げられている「野外教育の目標」および「野外教育に期待される成果」を参考にした。上記会議および報告については下記URLを参照（平成24年2月12日現在）。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/003/toushin/960701.htm

図7で示されるように、最も比率の高い利用目標は「自主性や協調性、社会性を身につける」の63%である。次いで、「その他」（14%）、「自然に対して興味・関心を持つようになる」（11%）が続いている。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

仲間と共に自然に挑み自然の厳しさや素晴らしさを学ぶ(2)、技術の向上とチームワークを高める、交流を深める、自然の中での練習を通して仲間やお世話になる方々との親睦を深める、自分の地域との比較学習、集団行動・時間を守る事、新入生のガイダンス、静の環境の中で落ちついた学習をすること、焚火による癒しの効果、定演に向け演奏曲を仕上げる、不登校児の心理面のケア、約束を守り冬の遊びに親しむ、リフレッシュ・仲間作り、利用者間の親睦を深め各自について知るようになる

図7　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）

この利用目標の平成19～22年度の変化については（図8）、「自主性や協調性、社会性を身につける」は4ヶ年を通じて最も比率の高い項目であるが、次いで高い項目については、平成19年度の「その他」（17%）、平成20年度の「自然に対して興味・関心を持つようになる」（12%）、平成21年度の「向上心や忍耐力を身につける」（13%）を経て、平成22年度では「その他」（14%）へと変遷している。

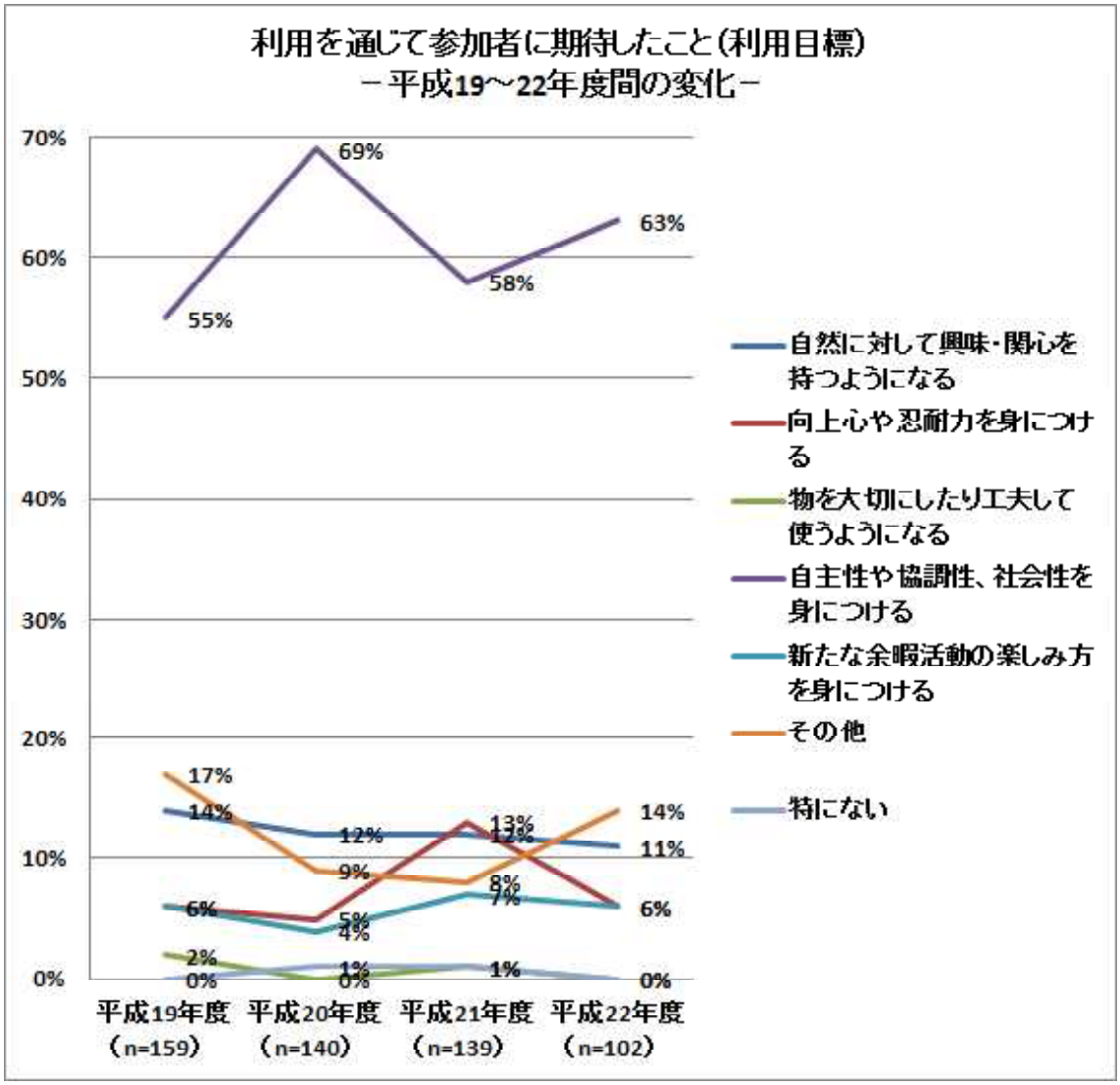


図8　利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）－平成19～22年度間の変化－

3.　利用目標の達成度

利用目標の達成度については、各利用団体が挙げた「利用を通じて参加者に期待したこと（利用目標）」について、今回の利用を通じて期待通り達成できたかどうかを、「期待以上にできるようになった」「だいたい期待通りできるようになった」「ほとんど期待通りできなかった」「まったく期待通りできなかった」のいずれかで各団体自身が判断した。

その結果、図9のように、「だいたい期待通りできるようになった」の比率が最も高く（77%）、次いで高いのは「期待以上にできるようになった」の17%となっている。

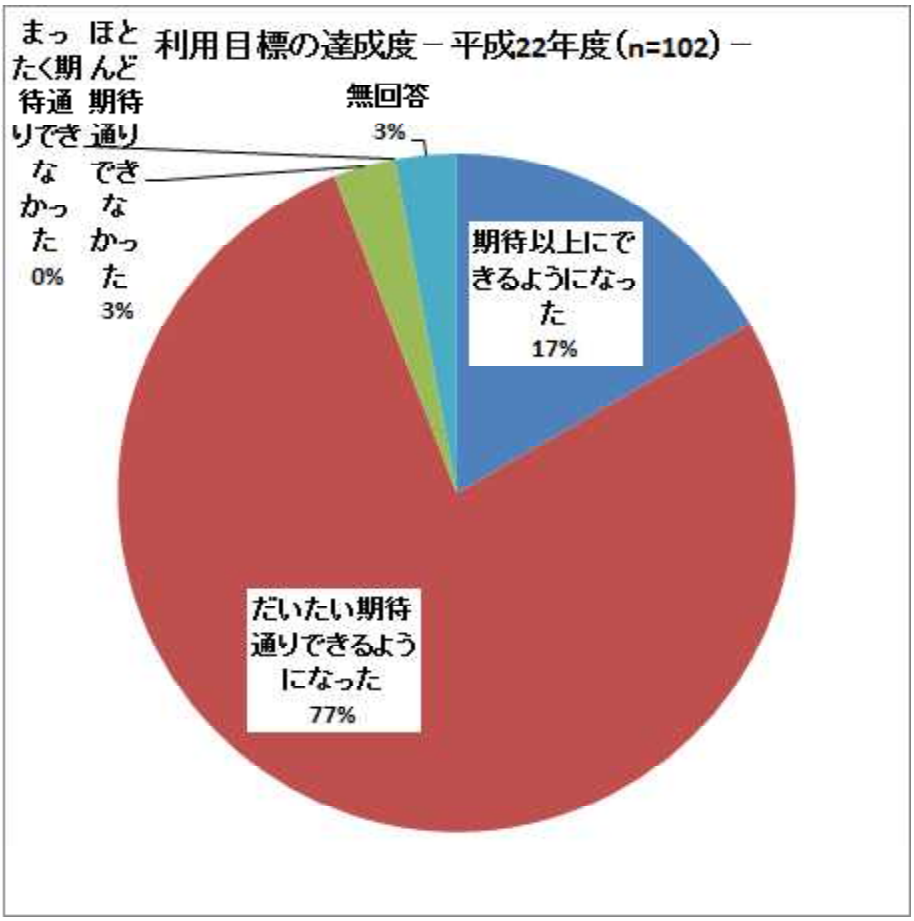


図9　利用目標の達成度

この達成度の平成19～22年度の変化については（図10）、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」を合わせた比率は4ヶ年を通じて90%を超えている。その内訳をみると、「期待以上にできるようになった」の比率は、平成21年度から全体の2割近くで推移するようになっている。

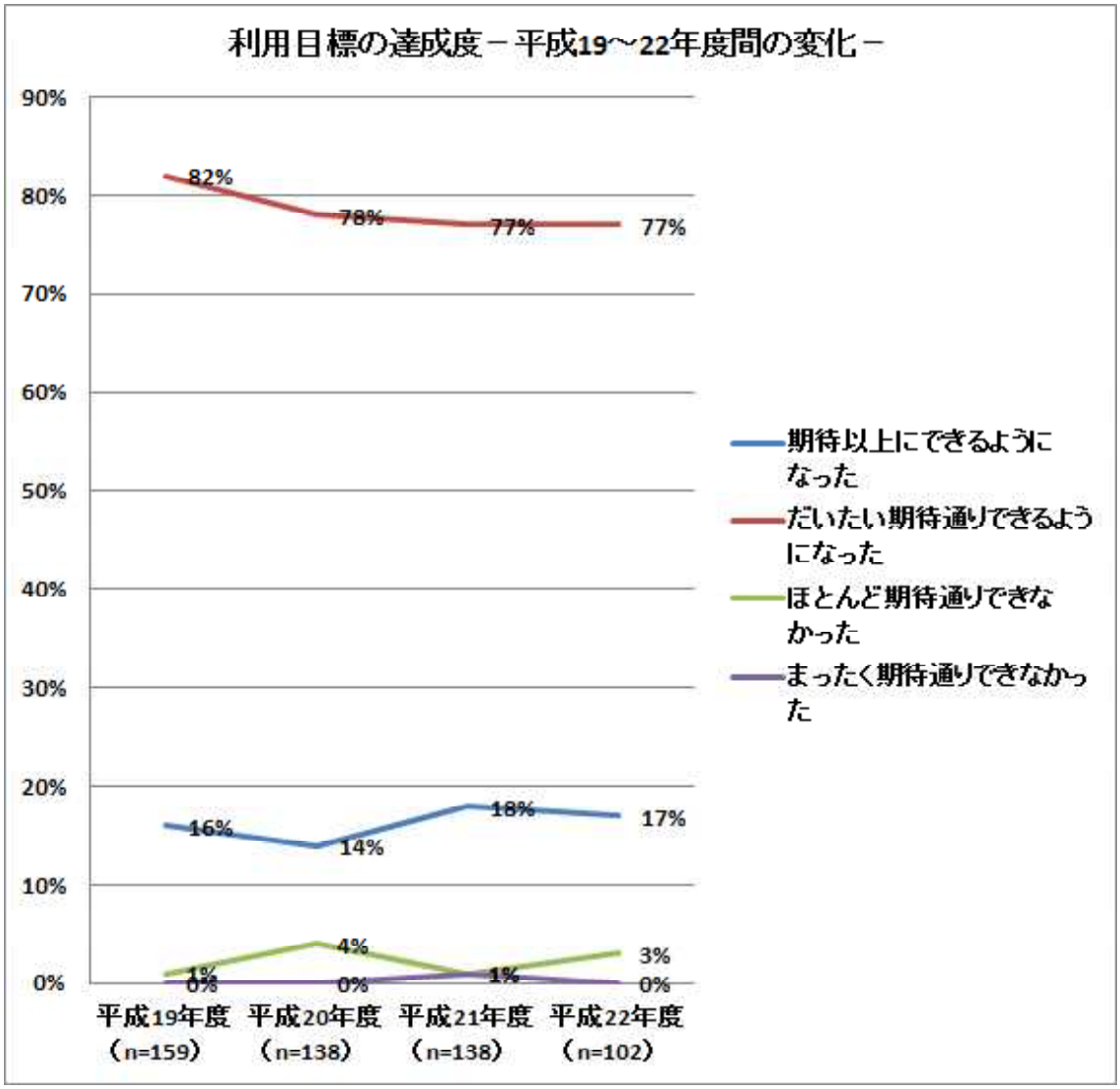
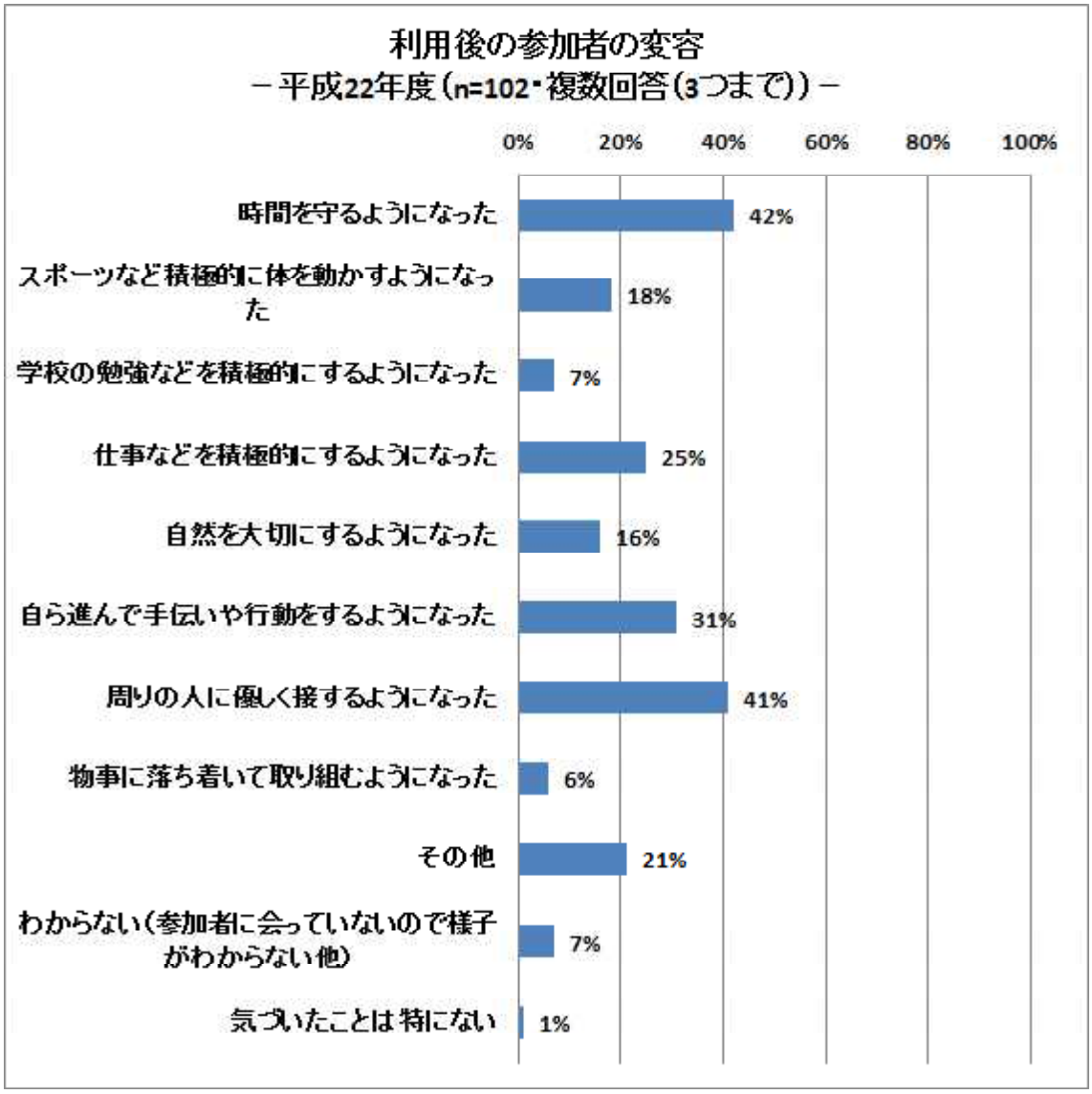


図10　利用目標の達成度－平成19～22年度間の変化－

4.　利用後の参加者の変容

利用後の参加者の変容については、利用後1ヶ月以内の変容について利用団体担当者が分かる範囲で捉えているが（複数回答・3つまで）、その結果は、「時間を守るようになった」が最も高く42%、次いで「周りの人に優しく接するようになった」（41%）、「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」（31%）が続いている（図11参照）。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

友好的になった(2)、新しいことに挑戦し体験したことが自信や主体性に影響した、色々な星座に興味を持つようになった、改善しようとしている、気に入ったようだ、協調性と団結力が強くなった、協力し合っている場面が見られた、校歌が大きな声で歌えるようになった、仕事を続けることができている、自分たちの課題が見つかった、自分の事は自分でできるようになった、週末に家族で朝霧へ行く生徒がいた、団員同士の理解が深まった、地域による環境の違いを意識するようになった、同期での絆が深まった、とても楽しい思い出として心に残り「あさぎり」とよく言っている、友達と仲よくなった、仲間のつながりが継続している、慣れない宿泊体験・スケートリンクでは力関係が逆転など助けたり助けられたりした事で他人を意識するようになった、初めてのスケートで滑れるようになり自信を持った、話し合うようになった、葉や花・鳥の声への興味がより増した、周りの人と協力して取り組む、3日間の反省を学校生活に生かす習慣づくりを行っている、身の回りのことは自分で行ったことが自信になった

図11　利用後の参加者の変容

この平成19～22年度間の変化について（図12）、「時間を守るようになった」「自ら進んで手伝いや行動をするようになった」「周りの人に優しく接するようになった」は4ヶ年通じて上位3項目で変わりない。これらのうち、「周りの人に優しく接するようになった」は平成19年度までは3位であったが、平成21年度でトップとなり、平成22年度では2位ながら41%まで達している。また「時間を守るようになった」は、平成21年度では3位に落ち込んだが、平成22年度ではトップで42%となっている。なお、「わからない（参加者に会っていないので様子がわからない他）」は平成19～20年度は10%台であったが、平成21年度は9%、平成22年度は7%に低下し、「気づいたことは特にない」は平成19年度の4%から平成22年度では1%となっている。

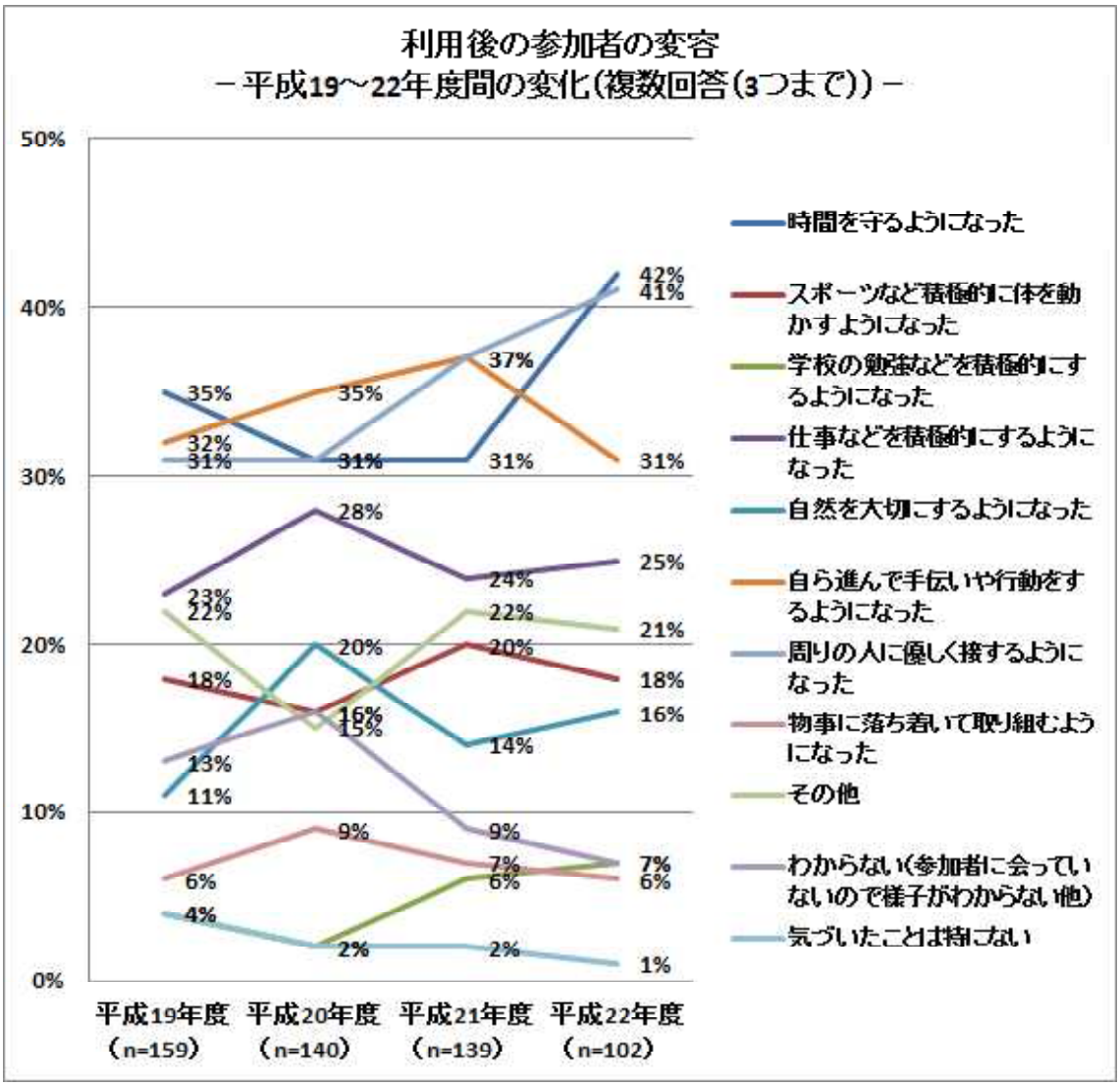
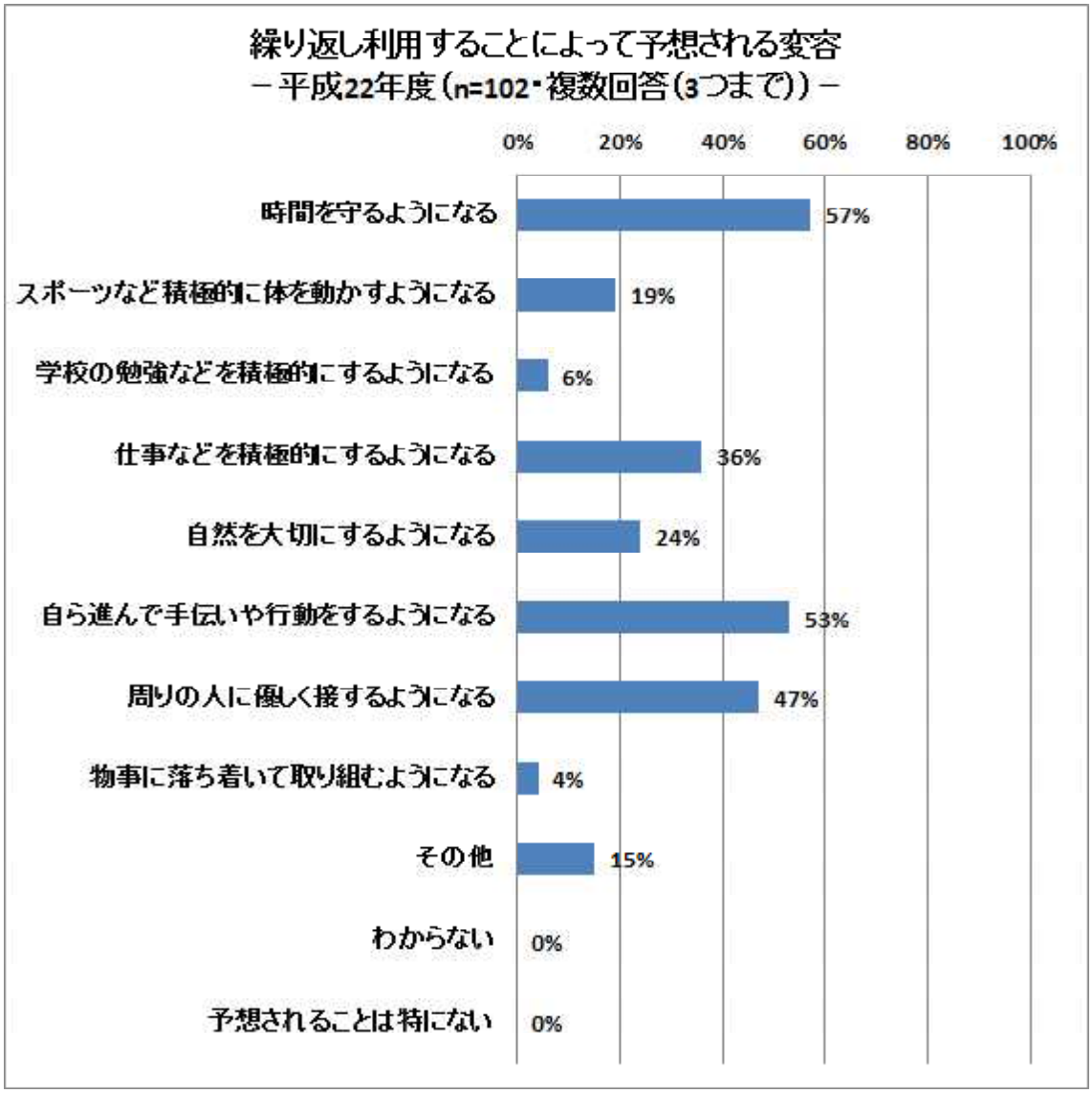


図12　利用後の参加者の変容－平成19～22年度間の変化－

5.　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は、利用後の参加者の変容と同じ項目について、今回各団体がそれぞれ計画した活動を繰り返し実施することによって日常の参加者に現れると予想されるもので捉えることにした（複数回答・3つまで）。その結果（図13）、「時間を守るようになる」が最も高い比率で57%、次いで「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」（53%）、「周りの人に優しく接するようになる」（47%）である。



「その他」の内訳（括弧内の数値は実数）

新しい事にも興味を持ちやってみようと思う気持ち、きまりを守り自分だけでなく周りのことを考えられる、郷土愛が身につく、協力して物事に取組むようになる、経験が広がるので生活（余暇）が豊かになる、校歌が歌え愛校心が持てる、自主性・協調性が養われる、自立する姿勢、新人研修の1つとして定着し就職先として選択される、星座に対する関心、責任感・結果を考え行動する力、互いを知り高めあう、仲間作りを継続し仲間で頑張る意識が継続しリフレッシュとしても離職防止につながる、何代もつづく壮大な伝説ができる、人間も自然の一部と認識する、本人の経験が増えることによる内面の成長

図13　繰り返し利用することによって予想される変容

繰り返し利用することによって予想される変容は平成20年度調査から加わった項目であるため、図14の通り3年間の変化であるが、それによると3ヶ年とも「時間を守るようになる」「自ら進んで手伝いや行動をするようになる」「周りの人に優しく接するようになる」の上位3項目は変わりない。また、3項目間の順位は変動しながら推移しているが、平成22年度に関しては「利用後の参加者の変容」と連動した順位となっていない。なお、3項目間の比率差は平成21度以降は10%程度である。

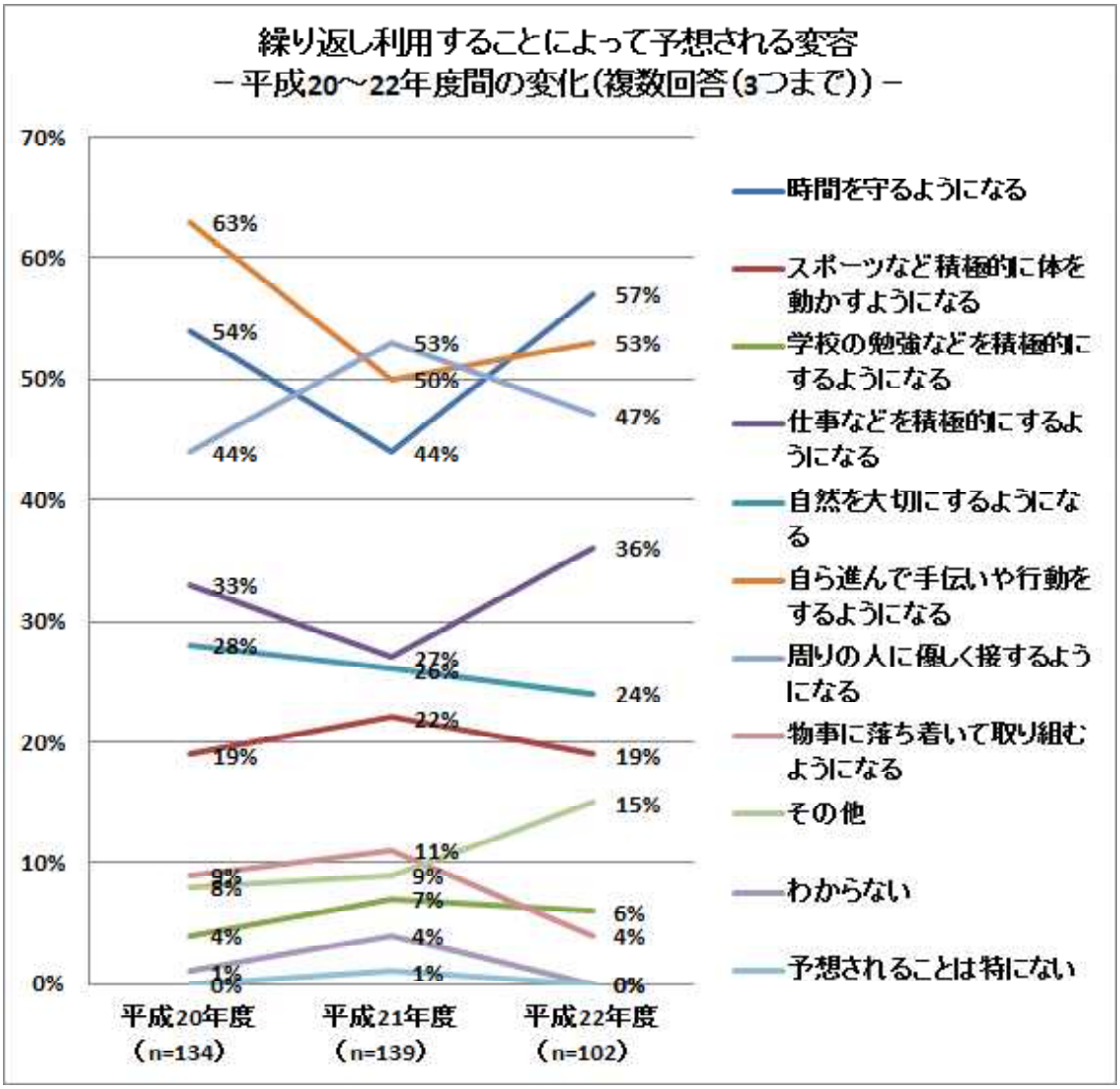


図14　繰り返し利用することによって予想される変容－平成20～22年度間の変化－

Ⅳ　調査結果のまとめと今後の課題

今回の調査結果は、次の4点にまとめることができる。

第1に、利用団体のプロフィール（利用団体の種類・利用団体の主たる年齢層）について、「小学校」「7～12歳」が3ヶ年とも最も比率の高いカテゴリであることは変わりない。但し、平成21年度までは「中学校」「13～18歳」の比率が徐々に高くなる傾向にあったが、今回の調査で再び小学校相当世代に偏りつつある。利用宿泊数は、「1泊」と「2泊」の占有率が年々高くなっている。

第2に、利用目標とその達成度について、4ヶ年とも「自主性や協調性、社会性を身につける」が最も比率の高い利用目標であるが、次いで比率の高い項目は年々変化している。利用目標の達成度は、「期待以上にできるようになった」と「だいたい期待通りできるようになった」が殆どで全体の9割を占め、「期待以上にできるようになった」は2割弱で推移している。

第3に、利用後の参加者の変容について、上位3項目は4ヶ年とも変わりないが、そのうち上位2項目である「時間を守るようになった」と「周りの人に優しく接するようになった」が平成22年度では40%台に達し、徐々に突出しつつある。

第4は繰り返し利用することによって予想される変容についてであるが、上位項目は3ヶ年とも変わりないが、3項目間の順位は変動しながら推移し、3項目間の比率差は10%程度で推移している。平成22年度に関しては第3で挙げた「利用後の参加者の変容」と必ずしも連動した順位となっていない。

最後に今後の課題について述べると、第1は、調査4年目（平成22年度）になって、過去3ヶ年で見られた変化傾向から新たな傾向が現れたことについて、これが果たして今後どう推移していくのか追究していく必要があろう。その際、この傾向が利用団体のプロフィールとも連動している可能性があるので、追分析を行うと同時に、センターの環境条件等の変化もその要因の1つである可能性もあるので、関係する外部データの収集も可能な限り行われることが期待される。

第2は、依然回収率・有効回収率が依然20%台に留まっていることについて、利用団体にはこのような調査活動への理解を求めるとともに、マンネリ化しがちな継続利用団体向けに新たな調査項目を設けるなどの工夫が求められる。